

## 初期ウェスレー説教におけるトマス・ア・ケンピスの影響

梅田 昇

### 序文

ローマ・カトリックの神学者であったマクシミン・ピエト(Maximin Piette)は、ジョン・ウェスレーと聖ベネディクト、聖フランシスのアシジ、イグナチウス・ロヨラの間、共通する点があることを指摘した<sup>1</sup>。彼は、*John Wesley in the Evolution of Protestantism*という著書の中で、ウェスレー神学におけるローマ・カトリックの影響を探求しようとし、プロテスタントの興隆に、いかにウェスレーと彼の運動が貢献したかを提示しようとする。ジョージ・クロフト・セル(George Croft Cell)が、ウェスレーの信仰理解とは、プロテスタントの恵みの教理と、カトリックのホーリネスの倫理の統合であるという有名なテーゼを示した<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> Maximin Piette, *John Wesley in the Evolution of Protestantism* (New York : Sheed and Ward, 1938), p. 480. ピエティは、ウェスレーが、儀典的感覚と敬虔の点で聖ベネディクトと、また使徒的情熱の点で聖ドミニックと、またキリストに対する愛とこの世からの離別において聖フランシスのアシジと、天才的組織化としてイグナチウス・ロヨラと、類似していることを指摘している。また、ウェスレーと同時代に生きた聖アルフォンサスと回心の前に神の恐るべき裁きについて訴える点において、類似していることを述べている。つまり、ピエティは、カトリックの影響がいかにウェスレーの神学、メソジズムの形成と発展に大きな影響を与えたことを主張している。

<sup>2</sup> George Croft Cell, *The Rediscovery of John Wesley* (New York : Henry Hold and Company, 1935), p. 347. カトリックの中世における霊的、倫理的墮落にもかかわらず

神の摂理の中で、ジョン・ウェスレー(1703-91)は、教会歴史の豊かな霊的、神学的遺産を受け継いだ。彼は、ピューリタンのな雰囲気のある家庭環境で育ち、英国国教会の伝統の中で、初代教父の文献も学び、神学的には高教会に見られるアルミニアン神学の影響を受け、モラヴィアンの生ける信仰からも多くを教えられた。ウェスレー神学の権威者であったアウトラーは、ウェスレー神学の源泉について、「彼の源泉は、本当に驚くばかりである」(*BE Works I*, 68)と記している。少なくとも、ウェスレー神学の源泉として、少なくとも10の源泉を挙げることができる。(1) 聖書、(2) 古典書、(3) 初代教父、(4) 東方教会、(5) カトリック神秘主義、(6) ルターやカルヴィン、アルミニウスを含む宗教改革者、(7)モラヴィアン、(8)ピューリタニズム、(9) 英国国教会、(10) 彼の同時代の思想<sup>3</sup>。その他にも、ドイツ敬虔主義、アナバプテストやクエイカー主義を含むラディカル・グループの影響も考えられる。アウトラーは、ウェスレー神学の源泉について、(1) 信仰義認については宗教改革者(アングリカン)から、(2) 信仰の確証についてはモラヴィアンたちのような敬虔主義者から、(3) 神人協同主義の概念については東方教会教父たちから、(4) ディヴォーションとしてのクリスチャン生活についてはジェレミィ・テラー、ア・ケンピス、ウィリアム・ロー(スクーガル)から、(5) 完全の理念についてはマカリオスを通してニュッサのグレゴリオから学んだと的確に整理している<sup>4</sup>。

---

ず、ホーリネスとディヴォシヨナルな教えと生活は、主としてカトリック教会下の神秘主義者たちによって保たれてきたと言えよう。

<sup>3</sup> Noboru Umeda, *John Wesley as a Systematic Theologian : The Analysis of Wesley's Sermons from the Perspective of Systematic Theology*. Ph. D. dissertation, Newport University, 2003, pp. 107-71. 著者は、ウェスレーが組織神学者であることを論証するための一つとしてウェスレー神学の源泉を扱っている。彼は実に多くの源泉から学び、彼の神学が形成されていったことがわかる。アウトラーは、*BE Works I-IV*の序論の中で、(1) 聖書、(2) 古典書、(3) 初代教父、(4) 教父時代から、英国宗教改革まで、(5) 英国国教会とピューリタン伝統、(6) 同時代の文化を指摘している。アウトラーは、ウェスレーを単にメソジストの統領としてだけでなく、教会史における、偉大な思想家、神学者としてウェスレーを捕らえている。アウトラーの、ウェスレーの神学の源泉の分野における貢献は偉大である。*BE Works I-IV*はそのための貴重な資料を提供している。

<sup>4</sup> Albert Outler, ed., *John Wesley* (New York : Oxford University Press, 1964), p.

しかし、聖書こそ、ウェスレー神学の最大の源泉であるが、彼が、英国国教会の司祭宅に育ち、国教会の神学教育を受け、生涯国教会に留まったことから、具体的にはトマス・克蘭マー (1489-1556) やウィリアム・ベバリッジ(1637-1708)に代表される国教会の(具体的には、共通祈祷書や39信仰箇条に見られる)神学に、最も影響されたと理解するのが健全であろう<sup>5</sup>。この基本的な事実を捕らえた上で、ウェスレーへの、いろいろな神学的な影響を理解することが必要であろう。

ウェスレーは、さまざまなカトリック神秘主義者から、靈的、神学的影響を受けたと言える。キリストの模範に倣う聖なる生活を教えたトマス・ア・ケンピス(c.1380-1471)、神の臨在の中を生きるという敬虔の修業を教えたブラザー・ローレンス(1605-91)、自己否定による聖なる生活を実践したデレンティ(1611-49)、キリストとの神秘的、靈的一致を説いたマダム・ガイオン(1648-1717)、聖なる生活を強調したヘンリー・スクーガル(1650-78)、意図の純潔やキリスト者の完全に関する教えをなしたフランソワ・フェヌロン(1651-1715)というような神秘主義者たちの感化を受けた。ウェスレーは、1773年、マダム・ガイオンの伝記を読んだ後で、ビショップ婦人あての手紙の中で、「ほとんどの神秘主義者に優れたところがある。彼らのほとんどは、ローマ教会の下に生きたので、彼らは恵み深い神の摂理が、暗黒に輝くために興された光であった。しかし、彼らは明瞭な、安定した、一定の光を与えていない」(手紙、to Mary Bishop, 1773. 9.19)と神秘主義者について記してお

---

119.アウトラーは、この書によってウェスレーを神学者の位置へと引き上げた。彼は、彼の神学の源泉を述べたあとで、彼の神学が、英国国教会神学の枠組みの中で形作られたことを記している。彼がウェスレーを民衆神学者 (a folk theologian) として捉えたことは有名である。

<sup>5</sup> Frank Baker, *John Wesley and the Church of England* (London: Epworth Press, 1970), p. 29. ベーカーは、ウェスレーと英国国教会の密接な関係を扱った貴重な書がある。メソジスト運動は、英国国教会のもとにおける靈的刷新の運動であった。ウェスレーは、若い時から、英国国教会の教理に親しみ、宗教箇条を尊敬し、祈祷書を愛し、礼拝に参加していた。ベーカーは、メソジスト運動の指導者としてのウェスレーと英国国教会の関係を二つにまとめている。(1) 英国国教会の教理と規律と礼拝にできるだけ、密接であること、(2) また、神が召された奉仕のために求められる所や時にはどこでも、いつでも柔軟に対応すること。適切な表現と言えよう。

り、ウェスレーの、神秘主義者に対する肯定的、否定的な面を含む両面の評価が、端的に表現されている。

アウトラーは、ウェスレーに影響を与えた神秘主義者を(1) 自発的神秘主義者(ア・ケンピス、ウィリアム・ロー、スクポリ)、(2) 静寂的神秘主義者(モリノス、マダム・ガイオン、サルのフランソワ)、(3) 初代教父や東方教会の影響を受けた神秘主義者として分類した<sup>6</sup>。初期ウェスレーは、中世の神秘主義者ア・ケンピス、同時代に生きたアングリカンの神秘主義者ウィリアム・ローのような自発的神秘主義者から、より多くの影響を受けたのである。本小論では、その中で、ア・ケンピスの、初期ウェスレーの説教に対する影響について論じてみることにする<sup>7</sup>。

## 1. 初期ウェスレーと神秘主義者トーマス・ア・ケンピス

ウェスレーの生涯をどのように区分するかと言うことは、簡単なことではない。アウトラーは、彼の生涯を三つに区分し、多くのウェスレー研究者の間で受け入れられた。初期ウェスレー(1725-38)、中期ウェスレー(1739-64)、後期ウェスレー(1765-91)に分類するわけである<sup>8</sup>。初期ウェスレーは、オックスフォード時代から、アルダスゲイト経験に至るまでの、霊的、神学

---

<sup>6</sup> Outler, *John Wesley*, pp. 251-52 ; Robert G. Tuttle, *John Wesley : His Life and Theology* (Grand Rapids : Francis Asbury Press, 1978), pp. 337-38. タートルは、ウェスレーに対する神秘主義の影響をたどりつつ、自叙伝的にウェスレーの伝記を著した。

<sup>7</sup> ジョン・ウェスレーに対する『キリストに倣いて』の影響について、ホームページ [www.gaudebo.de/texte/imitatiochristi.pdf](http://www.gaudebo.de/texte/imitatiochristi.pdf) に興味深い記事を見出すことができる。Wolfgang Jockusch, Thomas a Kempis' "Imitation of Christ" in John Wesley's Spirituality and Theology."

<sup>8</sup> *BE Works I*, 62-66 (アウトラーは、前期ウェスレーから中期ウェスレーの転換、つまり 1738 年 5 月のアルダスゲイト経験に比べて、中期ウェスレーから、後期ウェスレーの転換 1765 年は、さほど明確でないことを認めている。) ; Randy L. Maddox, *Responsible Grace: John Wesley's Practical Theology* (Nashville : Kingswood Books, 1994), p. 20 ; Mitsuru Fujimoto, *John Wesley's Doctrine of Good Works* (Ann Arbor, Michigan : UMI, 2001), p. 12. 藤本満氏は、この論文の中で、この前期ウェスレー、中期ウェスレー、後期ウェスレーの枠組みを用いて、ウェスレーの「良いわざ」の理解と発展の問題を論じている。

的追及の期間であった。伝統的にアルダスゲイト体験が強調され、初期ウェスレー研究は、回心前の誤った神学であると理解されて、おろそかにされてきた傾向があったが、アウトラーは、初期ウェスレーの重要性を強調した。若きウェスレーは、どのように神秘主義者ア・ケンピスと出会うことが許され、ア・ケンピスの影響を受けるに至ったのだろうか。

## A. 家庭環境を通しての影響

若くして、ピューリタンの家庭に育ち、国教会に転籍した両親で形成される彼らの家庭は、国教会に属しながらも、ピューリタンのような雰囲気であったと考えられる<sup>9</sup>。しかし、ウェスレー家では、クエイカーの創始者ジョージ・フォックス、スクポリ、ヘンリー・スクーガルなどの神秘主義者の書物が読まれていた<sup>10</sup>。アウトラーは、ウェスレー家が愛読した霊的書物を紹介している。(1) Henry Scougal, *The Life of God in the Soul of Man* (1677)、(2) Lorenzo Scupoli, *The Spiritual Struggles*、(3) Lewis Batly, *The Practice of Piety* (1613)、(4) Richard Allestree, *The Whole Duty of Man* (1657)、(5) Henry Hammond, *A Practical Catechism* (1645)<sup>11</sup>。ウェスレーは、このような書物が読まれるような霊的な家庭において成長したわけである。ピエトは、「彼らの内的願望に対する火は、スザンナがパスカルや『キリストに

<sup>9</sup> Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (Nashville: Abingdon Press, 1966), p. 22. 両親がそれぞれピューリタンの家庭に育ったことから、このことは容易に理解できる。スザンナの父親サムエル・アンネスレー博士 (1620-96) は、“St. Paul of Nonconformity”として知られ、彼の敬虔さは有名であった。ウェスレー家は、国教会の高教会の雰囲気でありながら、本質的にピューリタンの家庭であったと言えるだろう。ピューリタンの家庭では、家庭礼拝や個人的な祈りが重要視された。

<sup>10</sup> Tuttle, *John Wesley: His Life and Theology*, p. 73n. タートルが、ウェスレーの少年時代、彼の家で、リチャード・バックスター、ジョン・バンヤン、ジョージ・フォックス、スクポリーカスタンザ、ヘンリー・スクーガルなどがエプワースの牧師館で霊的に読まれたことを指摘していることは興味深い。

<sup>11</sup> Frank Whaling, ed., *John and Charles Wesley: Selected Writings and Hymns* (New York: Paulist Press, 1981), p. xiv. アウトラーは、序の中で、ウェスレーの神学形成について述べている。「霊性」を論じつつ、特に、ウェスレーに対する東方教会の影響について、適切な言及がなされている。

倣いて』を読むことによって植え付けたのである」<sup>12</sup>と神秘主義の影響を指摘している。スザンナは、子どもたちの快樂を罪深いものとして責めるために、ア・ケンピスの本を用いることもあったようである<sup>13</sup>。

若きウェスレーが、チャーターハウスで学んでいた頃、チャブレンであったジョン・キング博士は、いつも『キリストに倣いて』を持ち歩いていたと言われている<sup>14</sup>。若きウェスレーは、キング博士によって引用される『キリストに倣いて』の思想に聞き入っていたのかもしれない。ただ、少年ウェスレーがこの頃、ア・ケンピスの『キリストに倣いて』をどれだけ読み、理解したかについては不明である。

## B. オックスフォードでの影響

ウェスレーは、『クリスチャンの完全の平明なる解明』の中で、若きオックスフォード時代、靈的書物に感化を受けたことを記録している<sup>15</sup>。彼は、1725年、ジェレミー・テーラーの『聖なる生と死に関する規則及び訓練』を読み、意志の純潔について知り、深く感動した。同年に彼は、ア・ケンピス

---

<sup>12</sup> Piette, *John Wesley in the Evolution of Protestantism*, p. 474. ピエティは、母スザンナの靈的感化の大きさを指摘している。スザンナが存在の大きさが過度に強調される中で、父サムエルの影響は、多くの伝記では、しばしば無視されるが、父の影響も忘れてはならないだろう。

<sup>13</sup> Maldwyn Edwards, *Family Circle : A Study of the Epworth Household in Relation to John and Charles Wesley* (London : Epworth Press, 1949), p. 68; William Ragsdale Cannon, *The Theology of John Wesley with Special Reference to the Doctrine of Justification* (Nashville : Abingdon Press, n. d.), p. 56.

<sup>14</sup> M・シュミット『ジョン・ウェスレー伝、回心への内的発展』新教出版社、1985年、71頁；Martin Schmidt, *John Wesley : a Theological Biography*, trans. By Norman Goldhawk (Nashville : Abingdon Press, 1962), p. 67. 『キリストの模範』が、英語に翻訳されたのは、1502年であったとシュミットは記している(82頁)。

<sup>15</sup> ジョン・ウェスレー、ジョン・フレッチャー『キリスト者の完全』日本ウェスレー出版教会、1987年、3-5頁；*Works XI*, 366-67. この書は、ウェスレーが「キリスト者の完全」の思想を変化させているという批判に答えるためにかかれたものであり、ウェスレーは、若きオックスフォード時代から振り返り、一貫して、変わることなく「キリスト者の完全」を信奉してきたことを述べている。1766年に初版が出され、1777年以後改訂がなされていない。

の『キリストに倣いて』を読んだ。彼がア・ケンピスの書を読むに至ったきっかけは、友人ロバート・カーカムの子供サリーに勧められたからであった<sup>16</sup>。彼は、サリーの宗教的感性のゆえに、彼女にある種の恋愛感情を持っていたのかもしれない。ジョンは、母スザンナに「以前には深く読むことのなかったア・ケンピスを読むように、私は最近勧められた。彼は、偉大な敬虔と献身の器に違いないと思う。しかし、大切な点で、彼と意見が異なっていることは残念である」(手紙、to Susanna Wesley, 1725. 5. 28)と書き送っている。当初、ア・ケンピスを読んで当惑を覚えた。しかし、深く読むことによって、ア・ケンピスの真理を次第に悟るようになった。「内的宗教の性質と範囲、心の宗教が今や以前にもまして私に現された」(ウェスレー、フレッチャー『キリスト者の完全』4頁; *Works XI*, 366)と記し、ケンピスの書物から、真の宗教は儀式や規則にあるのではなく、キリストとの内的な関係と交わりにあることを教えられた。息子ジョンの手紙に対して、スザンナは、返事の中で「私は、手元にケンピスの書をずっともっている。しかし、最近読んでおらず、あなたが言及している箇所を思い出すことができない。しかし、あなたが彼を正当に扱うことを信じている。……私は、ア・ケンピスを正直で、弱い人間であり、すべての歓喜や快楽を罪深いものとして、非難することにより、知識以上に、熱心さを持っていると理解している」(手紙、from Susanna Wesley, 1725. 6. 8)と記している。父サムエルは、ジョンに書き送った手紙の中で、「私は、友人と旧友のケンピスを持っているだけで、彼を迷信と熱狂さにもかかわらず、控えめにしつつも豊かな益をもって読むことができる」(手紙、from Samuel Wesley, 1725. 7. 14)と記し、父サムエルは、ア・ケンピスの長所、短所を指摘することをはばからなかった。

ウェスレーは、1726年3月17日、リンカーン大学の研究員に選ばれ、ウィリアム・ローの『キリスト者の完全』を読み始め、ア・ケンピスとローの書物の両方が、彼に感化を与えた。1729年に『敬虔で聖なる生涯への招き』が出版されて、彼も読むことが許されたようである<sup>17</sup>。若くして、ア・ケン

<sup>16</sup> 野呂芳男『ウェスレー』清水書院、1991年、92頁; John Pudney, *John Wesley and His World* (London: Thames and Hudson, 1978), pp. 26-27.

<sup>17</sup> Cannon, *The Theology of John Wesley*, p. 57.

ピスの『キリストに倣いて』のような靈的書物に出会い、彼の生涯に一つの方向性、ある種の靈的な覚醒を与えられたと考えてよいだろう<sup>18</sup>。ウェスレーは、アルダスゲイト経験の日の日誌に、若き時代を振り返って、「神の摂理は、私をケンピス著『キリストに倣いて』に導いてくれたので、私は、真の宗教が心の中にあること、神の律法が、私たちの全言行に及んでいると同じく、思想にも及んでいることを知り始めた。……それをしばしば読んでいる中に、初めて読むような気分になって、おおいに意識的な慰めを覚えた」(日記、1738. 5. 24)と記している。

### C. ホーリー・クラブでの影響

弟のチャールズらによって始められたホーリー・クラブのリーダーに、ウェスレーは1729年に選ばれた。学究的な、靈的な、実践的な面を備えていたホーリー・クラブは、彼の信仰と神学的な確立に大切な時であった。1730年から1732年にかけて、会員の間で、靈的な書物として、ア・ケンピスの『キリストに倣いて』、ネルソンの*Method of Devotion*、アレスツリーの*The Whole Duty of Man*、ジェレミー・テラーの*Holy Living*や*Holy Dying*、ハッチンソンの*Essay on Passion*や*Enquiry into the Origins of Beauty and Virtue*が読まれたようである<sup>19</sup>。スザンナは、1732年、『人の魂の中の神の生命』とともに、ア・ケンピスを息子のジョンに推薦している(手紙、from Susanna Wesley, 1732.10. 25)。1733年に「心の割礼」という説教を通して、クリスチャンの完全の概念を発表していることから、ホーリー・クラブの大切さが理解できる。彼は、『キリストに倣いて』の改訂版として*The*

---

<sup>18</sup> 野呂『ウェスレー』102頁。野呂氏は、ウェスレーの靈的書物との出会いを評価し、1725年を第一の回心と解釈している。アウトラーやピエティ・マクシンなども同じような理解である。

<sup>19</sup> Richard Paul Heitzenrater, “John Wesley and the Oxford Methodists, 1725–1735”, Duke University, Ph.D. Dissertation, 1972, p. 118. この論文は、グリーンの*The Young Mr. Wesley*とともに、初期ウェスレーの研究に大きな貢献をした、すぐれた論文である。ハイツェンレーター教授は、特に彼の個人的な日記の解読に成功し、初期ウェスレー研究に新たな光を投げかけた。



*Christian's Pattern*<sup>20</sup>を1735年に出版している。セルは、この書が、リンカーン大学の研究員としてなされた優れた翻訳であると指摘している<sup>21</sup>。

#### D. ジョージア時代の関わり

父が死んだあと、ジョージアに向けて出発したのは、1735年10月14日のことであった(手紙, from Susanna Wesley, 1732. 10. 25)。個人的日記の解説によって、初期ウェスレーの生活が次第に明らかになった。彼は、フランク、ローレンス、ウィリアム・ローの著作*Treatise on Christian Perfection*、*Theologica Germanica*、ジョン・ノリス、ア・ケンピス、レンティなどを読んでいることから、ジョージア時代にも、神秘主義に対する深い関心があったことが伺える<sup>22</sup>。ソフィアがウィリアムソン氏と結婚をすると知った1737年の3月9日、ア・ケンピスを読んでいる<sup>23</sup>。ラックは、「神秘主義との出会いは、ウェスレーの救いの理解にとってより重要であった」<sup>24</sup>と記

<sup>20</sup> John Wesley, *The Christian's Pattern or an Extract of the Imitation of Christ by Thomas a Kempis*, reprint (Salem, Ohio : Schmul Publishers, 1975). ウェスレーは、この書の大切さを認識していたので、メソジストのために、この書の抄録を1735年に出版したわけである。

<sup>21</sup> Cell, *The Rediscovery of John Wesley*, p. 112. ウェスレーは、ラテン語から直接翻訳することによってすぐれたものを生み出すことが許された。

<sup>22</sup> *BE Works* XVIII, 312-558. ウェスレーの個人日記の翻訳に成功したハイツェンライター教授の貢献は、ウェスレー研究にとって甚大である。もちろん、ウェスレーは、神秘主義者だけを読んでいいた訳ではない。彼は、聖書を初めとして、祈祷書、ニコデモス、マカリウス、エンチャードの『教会史』などを読んでいた。ウェスレーは、彼の個人日記(ウェスレーの航海日誌、ジョージア日誌、ジョージア日誌2)によると、1736年の5月から6月にかけてア・ケンピスをしばしば読んだことが記録されている。初期ウェスレーの読書の内容については、グリーンの *The Young Mr. Wesley* の付録(289-302頁)を参照のこと。この付録によると、ア・ケンピスについては、1725年、1929年、1730年、1732年のウェスレーの読書リストに加えられている。

<sup>23</sup> Richard P. Heitzenrater, *The Elusive Wesley*, 2 vols. (Nashville : Abingdon Press, 1984), I : 83; *BE Works* XVIII, 483. この日の個人的な日記によると、ソフィアの結婚のことを聞き、ウェスレーは失望し、祈れないほど心の動揺を覚えたようである。そのような中で、ア・ケンピスの書に慰めを見出したと思われる。

<sup>24</sup> Henry D. Rack, *Reasonable Enthusiast : John Wesley and the Rise of*

している。神の摂理ではあるが、彼は、モラヴィアンとともに、神秘主義の影響もあって、アルダスゲイトの経験へと導かれたと言えよう。ケネス・コリンズ教授は、『キリストに倣いて』について、「この古典は、ウェスレーの生涯と思想に深遠な影響を与えた」<sup>25</sup>と評価している。また、ミッチェルは、ウェスレーのルーツを論じるに当たり、まず、ア・ケンピスを取り上げて、「15世紀の修道僧トーマス・ア・ケンピスの、18世紀の英国の使徒（ウェスレー）に対する影響は、実に驚くべきである」<sup>26</sup>と記していることは興味深い。

## 2. 初期ウェスレーの説教について

初期ウェスレーの説教は、アルダスゲイト前のものである理由で、ウェスレー研究家の間でも、軽視されてきたという歴史があった。内容的にみても、例えば、救いやキリストの完全という教理に注目して読んでみても、初期ウェスレーの説教には、教理的な明瞭さが欠けているように思われる。リッグは、初期ウェスレーは、奴隸的な律法主義者であり、恩寵の手段を守ることこそ、ホーリネスと幸福への道であると理解していたと指摘している<sup>27</sup>。ウェスレー自身は、アルダスゲイト経験前の自分を「サバンナ滞在中も、私はこのようにして空を打った。キリストを信ずる信仰によって、救いはすべての信ずるものに与えられるというキリストの義を無視しつつ、己が義をたてることに熱中した」（『日誌』1738. 5. 24）と描写している。

新しいウェスレー全集の編集に精力的に取り組んだアウトラーは、初期ウ

---

*Methodism* (London : Epworth Press, 2002), p. 101.

<sup>25</sup> Kenneth J. Collins, *A Real Christian : The Life of John Wesley* (Nashville : Abingdon Press, 1999), p. 22. コリンズは、ウェスレーにとって、ア・ケンピスとの出会いこそ、内的な宗教に目覚めた最初の時であり、神にこころのすべてをささげること、意図の単純さの美について学んだと指摘している。

<sup>26</sup> T. Crichton Mitchell, *The Wesley Century* (Kansas City : Beacon Hill Press, 1984), p. 23.

<sup>27</sup> James H. Rigg, *The Living Wesley* (London : Charles H. Kelly, 1891), p. 64. リッグは、1731年から1735年のウェスレーの神学的、宗教的状态を論じながら、ウェスレーが明確な福音経験に達していないことを指摘している。

エスレーの説教を全集に含めた。アウトラーは、1725年9月19日の按手礼の日から、ジョージアに出発にする日までの1735年10月21日までに、68回の説教をしたと指摘している(*BE Works I*, 29)。新ウェスレー全集に含まれているウェスレーの151の説教のうち、19が初期ウェスレーの説教と考えられる(付録2参照)。そのうちの10の説教は、ウェスレーの手元にはなく、9つの説教は、チャールズ・ウェスレーの書斎に保存された結果、後に奇跡的に回復されたのである<sup>28</sup>。

アウトラーは、「これらの説教は、他の何物よりも、聖公会司祭として、オックスフォードの学者として、地方教会の父の副牧師としての、彼の初期の典型的な、聖公会的なクリスチャン信仰と生活の見解を示している」(*BE Works IV*, 201)と記している。初期ウェスレーは、アルダスゲイト経験に到達しておらず、福音体験はまだ自分のものとしていながつが、初期ウェスレーの説教は、彼の神学の発展、中期や後期のウェスレー神学を理解するためにも見逃してはならない大切な資料である。アウトラーは、「これらの初期ウェスレーの説教は、後の、成熟した考えの多くの種を含んでいる」(*BE Works I*, 35)と述べて、初期ウェスレーの説教を学ぶことの重要性を強調した。ウェスレーの神学の全体を穩健に理解するために、私たちは、初期ウェスレーの説教に注目すべきである。

### 3. 初期ウェスレーの説教への、ア・ケンピスの影響の吟味

ア・ケンピス(c. 380–1471)は、オランダの神秘家であり、神との靈的交わりを達成するためのマニュアルである『キリストに倣いて』を著した。彼は、共住生活の兄弟会(Brothers of the Common Life)で教育を受けた。14世紀後半に広がったDevotio Modernaという宗教運動は、スコラ主義に対する反動であり、オランダのゲラルド・グロート(1340–84)によって創設され、彼の弟子達は、共住生活の兄弟会と呼ばれ、教育に重点を置き、宗教改革の

<sup>28</sup> *BE Works I*, 34 ; Albert C. Outler, *John Wesley's Sermons : An Introduction* (Nashville : Abingdon Press, 1991), p. 43. アウトラーは、ハイツェンレイター教授が、チャールズ・ウェスレーの字体を見抜いた功績を指摘している。

先駆者達にも大きな影響を与えたと考えられる<sup>29</sup>。ア・ケンピスは、共住生活の兄弟会を通して、Devotio Modernaの影響を受けていたのである。ア・ケンピスは、「全聖書を心で知り、すべての哲学者の名言を知ったとしても、神の愛と恵みがなかったら、あなたに何の益があるだろうか」<sup>30</sup>と述べ、哲学的な思索や探求よりも、キリストとの交わり、キリストの模範に実践的に倣うことを強調した。共住生活の兄弟会は、その福音的な教えのゆえに、カトリック教会から正式に認可されたことはなかった。ア・ケンピスは、Devotio Modernaの大きな感化を受けたのである。「救いは十字架にあり、いのちも十字架にある。……魂の救い、永遠のいのちの希望は、十字架にしかない」<sup>31</sup>と記しているようにア・ケンピスの教えには、福音的な響きがあり、カトリックだけでなく、広くプロテスタントからも受け入れられた<sup>32</sup>。

---

<sup>29</sup> B. K. Kuiper, *The Church in History* (Grand Rapids : Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1986), pp. 150–53. カイパーは、この運動の影響を受けた人物として、ウィセルのヨハネ( John of Wessel ), エラスムス(Erasmus)、ア・ケンピス、マルチン・ルターを挙げている。ウィセルのヨハネは、1445 年から 56 年までエルフルト大学の教授であったが、反カトリックの教えの故に、殉教の死を遂げた。中世後期に、福音的な救い論が見られ、後にルターは、この大学で、修士号を授与されている。エラスムスは、ルターの同じ時代に生きながら、カトリックに対する批判はあったものの、ルターとは一線を隠し、宗教改革運動には加わらなかった。ア・ケンピスは、共住生活の兄弟会の影響を受けながらも、その後、カトリックのアウグスチヌス会修道院に入っていることから、共住生活の兄弟会が、(1) カトリック、(2) 宗教改革運動、(3) 人本主義にもそれぞれ影響を与えたという興味深い事実を発見できる。ア・ケンピスは、アウグスチヌス会からの影響も受けている。ルターも、アウグスチヌス会の修道僧であった。共住生活の兄弟会については、詳しい説明 (Philip Schaff, *History of the Christian Church* VI, 278–84) がある。シャッフは、『キリストに倣いて』が、アウグスチヌスの『告白』やバンヤンの『天路歷程』とともに教会の歴史に最も大きな影響を与えた文献であることを指摘している。Devotio Moderna については、[www.etss/hts/MAPM/info3.htm](http://www.etss/hts/MAPM/info3.htm)や [www.ncl.ac.uk/lifelong-learning/distrib/reform14.htm](http://www.ncl.ac.uk/lifelong-learning/distrib/reform14.htm)などを参照できる。

<sup>30</sup> Thomas a Kempis, *The Imitation of Christ* (New York : Books, Inc, n. d.), p. 3 (I : I 章「キリストにならいて、この世のすべての虚栄をさげすむこと」)。Gerald Groote (1340–1384) が『キリストに倣いて』の著者であったという説もある。そうであれば、ア・ケンピスは、編集者か出版者と言うことになろう。

<sup>31</sup> 上掲書、p. 65 (II : XII 章「聖なる十字架の王の高道」)。

<sup>32</sup> ケアンズ『キリスト教全史』聖書図書刊行会、1957年、335頁；Peter Toon, “Thomas a Kempis,” in *The New International Dictionary of the Christian Church*

彼の著作としては、手紙、詩、説教などがあるが、『キリストに倣いて』の故に、広く世界に知られている。この書は、神との内的交わりを深め、保つためのマニュアルと言えよう。ア・ケンピスは、この書を通して、聖なる敬虔さ、実践的なホーリネスの概念をウェスレーに提供したといえよう。

この書は、4部から成り立っている。第一部は、霊的生活に関して有益な勧告、第二部は、内面的事がらを保つための勧告、第三部は、内的な慰めについて、第四部は、聖餐式に対する厳粛な勧告となっている。ア・ケンピスは、この書において、神学のすべてを論じているわけではなく、キリストの聖なる模範に倣う実践的な方法を論じている。例えば、謙遜、会話のあり方、誘惑に対する対処、誇りに対する警戒、服従、神の栄光に生きること、自己否定、忍耐、神との内的交わりなどの美德を扱っている。ア・ケンピスは、「完全なこの世の軽蔑、徳に進む熱心な願望、規律の愛、悔い改めの辛さ、従順の用意、自己の否定、逆境に耐えることは、幸福のうちに死ぬだろうという確信を私たちに与える」<sup>33</sup>と記し、このような表現にも、彼の死生観が見事に表現されている。この世での実践的ホーリネスこそ、ア・ケンピスの生涯的なテーマであった。『キリストに倣いて』は、実践的ホーリネスという面では、初期ウェスレーだけでなく、中期や後期ウェスレーに至るまで深遠な感化を与えている。ウェスレーは、メソジスト運動の指導者として、年會を導くようになってからも、ア・ケンピスを読んだことを「読めば読むほど、好きになった」（日記、1745.12.27）と記している。「富の危険」、「時をあがなうことについて」、「忍耐について」、「世と友になることについて」、「誘惑について」、「世の愚かさについて」、「増大する富の危険」のような後期の説教にも、ア・ケンピスの影響が見受けられる。

ウェスレーのア・ケンピスに対する態度は、当初、ある面において、否定

---

(Grand Rapids : Zondervan Publishing House, 1978), p. 972. ; Peter Toon は、「ア・ケンピスの書が、カトリック以外に受け入れられたのは、キリストと主に對する交わりに対する至高の強調があったからである」と記して、ア・ケンピスの書が、カトリックだけでなく、プロテスタントなどにも広く受け入れられた理由を述べている。また、Catholic Encyclopedia がケンピスについて詳しい記事を提供している。

<sup>33</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 9 (I: XXIII 章「死の思い巡らしについて」).

的であったが、彼は、ア・ケンピスの書を通して、彼の動機と意図を深く探られていったのである<sup>34</sup>。彼は、『キリストに倣いて』の改訂版として *The Christian's Pattern* を 1735 年にラテン語の原文から訳し、出版した。その序文の中に「意図の純潔を読むことによって、あなたの魂の利益だけを願い、また短い祈祷によって、あなたの理解を明るくする神の恵みを求める備えをしなさい。」<sup>35</sup>と記している。その中で、彼は、『キリストに倣いて』について「この全論文は、キリスト者の完全に関係するすべて、霊と真を持って神を礼拝する内的礼拝のすべての原則を含む、完璧な、完結した作品である」(*Works XIV*, 202: 1735 年に翻訳出版された『キリストに倣いて』に対する序)と説明を加え、この書の意義を高く評価している。完き愛は、(1) 完全な謙遜、(2) 絶対的な自己放棄、(3) 保留なき献身、(4) 神の意思との一致という要素を含むことを指摘している<sup>36</sup>。彼は、このような大切な真理、ホーリネスの教理をア・ケンピスから学んだのである。「キリスト者の完全」を達成するための段階として、まず神の恵みを、次に祈り、自己吟味、聖書を読むこと、聖餐式を挙げている<sup>37</sup>。しかし、この時点の初期ウェスレーの説教の中では、アルダスゲイト経験の前になされたものであり、例えば信仰義認のような、「信仰によって」という面が正しく強調されていないように思われる。むしろ、キリストが信仰者の模範であり、その模範に倣うことが強調されている。しかし、ウェスレーの神学の形成過程において、特に「キリスト者の完全」の教理の確立において、ア・ケンピスが、大きな影響を与えたことは事実である。初期ウェスレーは、ア・ケンピスからどのような霊的、神学的影響を受けたのであろうか。ア・ケンピスの著作から、初期ウェスレーに影響を与えたと思われるいくつかの点を指摘させて頂きたい。

---

<sup>34</sup> T. Crichton Mitchell, ed, *The Wesley Century* (Kansas City : Beacon Hill Press, 1984), p. 23. ウェスレーに影響を与えた書として、ア・ケンピスの『キリストの模範』とウィリアム・ローの *A Serious Call to a Devout and Holy Life* について論じている。

<sup>35</sup> Wesley, *The Christian's Pattern*, p. 5.

<sup>36</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 203. ケンピスの教えは、謙遜、服従、自己否定、献身というような美德であった。と同時に、彼の教えには、修道院運動に見られたような禁欲主義的な、世俗世界からの決別というような傾向性がある。

<sup>37</sup> 上掲書 p. 204 (IV: XVII 章「熱心な愛、キリストと結ばれるための熱烈な願望」)。

## A. 聖書の権威について

ア・ケンピスは、聖書に対する愛と尊敬に満たされていた。彼は、「聖書を読むことについて」という章の中で、「真理は、雄弁さの中ではなく、聖書の中に求められるべきである。聖書は、それが書かれたのと同じように、おなじ御霊によって読まれるべきである」<sup>38</sup>と記している。また、ア・ケンピスは、「私は、食べ物と光の必要を自覚する。……これらの二つなしに私は健康に生きることができない。というのは、神のことばは、私のたち魂の光であり、あなたご自身は、いのちの糧である」<sup>39</sup>とみことばの重要性について記している。ウェスレーは、1735年の「神のことばを腐敗させることについて」という説教の中で、聖書のことばについて「私たちが、神のことばを語ったのであれば、それは純粹で、混じりけのない神のことばでなければならない」(説教 137「神のことばを腐敗させることについて」三・1)と言及している。神のことばに何かを付け足したり、差し引いたり、また、不健全な解釈によって、神のことばを腐敗させてはならないのである。ウェスレーは、初期の説教の中にも、多くのみことばを引用していることから、みことばに対する愛と尊敬を有していた。

## B. 聖霊の働きについて

ア・ケンピスは、カトリックの神秘主義者でありながら、共住生活の兄弟会の影響のゆえに、信仰の福音的な理解を持っていたと思われる。ア・ケンピスは、聖霊について、「キリストの教理は、聖なる人々の教理に優る。御霊を持つ人は、その中に隠れたマナを見出すだろう」<sup>40</sup>と記している。聖霊に働きなくして、聖書は生ける神のことばでなく、書かれた律法に過ぎない。

<sup>38</sup> 上掲書 p. 9 (I : V 章「聖書を読むことについて」)。

<sup>39</sup> 上掲書 p. 194 (IV : XI 章「キリストの十字架と聖書は、忠実な魂に必要であること」)。

<sup>40</sup> 上掲書 p. 3 (I : I 章「キリストの模倣、世の空しさを軽蔑することについて」)。

聖霊によって生まれ変わる時に、聖書のことばがまさに魂の不可欠な糧となる。またア・ケンピスは、「この世の慰めの代わりに、あなたの御霊の、最も慕わしい油注ぎを私に与えてください。肉的な愛の代わりに、あなたの御名による愛に私を注ぎこんでください」<sup>41</sup>と祈り、聖霊の働きを求めていることから、ア・ケンピスが聖霊に対して健全な経験と理解を持っていたことを頷くことができる。

ウェスレーは1730年の説教「理解の約束」の中で、「私たちのうちに働いて、良いことをなしてくださるのは神の御霊であると経験、理性、聖書が真実な探求者を納得させる」(説教140「理解の約束」一・2)と述べている。彼は、1730年の「神の像」という説教の中で、「いのちの御霊の法が、私たちを罪と死の法から解放し、私たちを知識、美徳、自由、幸福へと回復する」(説教141「神の像」三・3)と言及し、聖霊の働きについて強調している。彼は、この説教の中で、(1) 原初的神の像、(2) 墮落した神の像、(3) 回復される神の像を扱っている。アウトラーはこの説教について「これは、初期ウェスレーの救いの順序(Ordo salutis)についての基本的な理解の宣言であった」(*BE Works IV*, 300)と評価している。聖霊こそが救いを始め、完成させてくださるお方である。また彼は、「一つのことが必要」(1734年)の中で、「愛における私たちの魂の更新は、創造と贖いの目的であるばかりでなく、神の摂理と、私たちにおける聖霊の働きの目的でもあり、ただ必要な一つのことである」(説教146「一つのことが必要」二・5)と記し、クリスチャン生涯のいろいろな段階で働かれるのは神のみわざの執行者としての聖霊であり、後に、聖霊論はウェスレー神学の大切な部分となったのである<sup>42</sup>。

## C. 内的宗教の必要性について

---

<sup>41</sup> 上掲書 p. 111 (III : XXVI 章「読書より、謙遜な祈りによって得られる自由な心の卓越さについて」)。

<sup>42</sup> L. M. スターキー著『ウェスレーの聖霊の神学』新教出版社、1985年 : Lycurgus M. Starkey, *The Work of the Holy Spirit : A Study in Wesleyan Theology* (Nashville : Abingdon Press, 1962). Mack B. Stokes, *The Holy Spirit in the Wesleyan Heritage* (Nashville : Abingdon Press, 1985).



神秘主義は、カトリックの戒律や儀式の遵守に満ち足りないと人々によって唱道された。真の宗教とは、儀式にあらず、神との内的交わりである。ケンピスは、『キリストに倣いて』のなかで、「外的なことをさげすみ、内的なことに専念することを学びなさい。そうすれば、あなたに入る神の国を理解するだろう」<sup>43</sup>と内的宗教の大切さを強調している。ウェスレーは、「1726年、私はケンピスの『キリストの模範』に接した。内なる宗教、すなわち、心の宗教の性質と範囲は、今や、今まで以上に強い光をもって示された」<sup>44</sup>と述べて、内的宗教の意義に学んだわけである。ウェスレーは、ア・ケンピスの『キリストに倣いて』を何度も読むことによって、本当の宗教というものは、儀式と律法の遵守ではなく、神との内的関係と交わりであることを学んだ。ア・ケンピスは、「イエスと会話をし、イエスを優れた知恵とし続ける方法を知ることは、偉大な技術である。謙遜で、平安を保ちなさい。そうすれば、イエスがあなたとともにいてくださいます」<sup>45</sup>と述べている。

ウェスレーは、1730年の「安息日について」という説教の中で、「私たちは、神の像を私たちの魂に完全にし、憐れみと真理を私たちの首に結びつけ、私たちの心の石版に深く書き付けることを私たちの特別な務めとしなければならぬ」(説教139「安息日について」三・1)と記している。安息日に礼拝を守るという形式以上に、神との内的交わりが彼の関心事となってきた。

#### D. キリスト者の完全、完き愛について

ウェスレーは、「完全」こそ、信仰者が生涯をかけて、追及すべき目標であることをア・ケンピスから学んだのである。W.キャンノンは、「キリスト者の完全の教理は、ウェスレー氏によって、家庭での教育、ティラー、ア・ケン

<sup>43</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 47 (II: I章「内的生活について」).

<sup>44</sup> ウェスレー、フレッチャー『キリスト者の完全』、4頁；*Works XI*, 366. 1726年という数字は、ウェスレーの記憶違いであったと考えられる (Skevington Wood, *The Burning Heart*, p.45を参照)。彼の日誌や母スザンナとの手紙から、ウェスレーは、『キリストに倣いて』に1725年、接したと考えられる。

<sup>45</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 57 (II: VIII章「イエスとの親しい会話について」).

ピス、ウィリアム・ローの学びからえた道徳的、靈的洞察の結果として、受け入れられたことを述べることは興味深い」<sup>46</sup>と指摘している。リントシュトレームは、「ウェスレーにとって、完全とは主に、意図の純粹さ、キリストの模倣、神と我々の隣人とを愛することという意味をもつのである」<sup>47</sup>と述べている。ア・ケンピスこそ、このような概念を若きウェスレーに与えたわけである。

ア・ケンピスは「この世におけるすべての完全は、ある不完全さを持っている。私たちの知識は、暗さがないというわけではない」<sup>48</sup>と記している。キリスト者の完全とは、神に対する愛において完全であるが、知識や判断や行動において完全にされることを意味していない。ア・ケンピスは、「愛のためになされる働きについて」という章の中で、「真実な、完全な愛を持つものは、何物の中にも自分自身を求めないし、すべてのことにおいて、神の栄光を追求するのみである」<sup>49</sup>と記している。「キリスト者の完全」の原型が、ア・ケンピスの表現の中に顕著に見出される。

1733年1月、聖マリア教会で、彼は「心の割礼」という説教をした。これは、彼の「キリスト者の完全」についての最初の明確な説教であった。彼は、「心の割礼とは、聖書にホーリネスとして使われ、直接的には罪からの浄化を意味する魂の習慣的な気質であると一般的に理解される」<sup>\*50</sup>と述べている。更に、心の割礼とは、謙遜、信仰、希望、愛を意味すると述べている。「あなたの心が、主のため以外の何物も愛さないほどに、全き愛に満たされ

---

<sup>46</sup> Cannon, *The Theology of John Wesley*, p. 240.

<sup>47</sup> H. リントシュトレーム著『ウェスレーと聖化』新教出版社、1989年、231頁；Harald Lindstrom, *Wesley and Sanctification: A Study in the Doctrine of Salvation* (Grand Rapids: Francis Asbury Press, 1980), p. 129. リントシュトレームは、ウェスレーのキリスト者の完全の理解に大きな影響を与えた人物として、ジェレミー・テラー、ウィリアム・ロー、トーマス・ア・ケンピスを挙げている。ウェスレーもそのことを『キリスト者の完全』の中で述べている。

<sup>48</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 7 (I : III 章「真理の教えについて」).

<sup>49</sup> 上掲書 p. 20 (II : XV 章「愛のためになされた行為について」).

<sup>50</sup> *Works* V, 203 : *BE Works* I, 402 (説教 17 「心の割礼」一・1)。アウトラーは、第一の大学説教は、1730年11月15日の聖マリア教会であったと指摘している (*BE Works* I, 33)。従って、1733年の1月1日の説教は、第二の大学説教と言えるわけである。

るように」(説教17「心の割礼」ニ・10)という祈りで、心の割礼を表現している。アウトラーは、この説教に関して「ウェスレーのすべての神学的発展の画期的な道標として立つ、これらの初期ウェスレーの説教の中で、最も顕著なもの、1733年1月1日に聖マリア教会でなされた第二の“大学説教”であった」(*BE Works I*, 33)と注釈をしている。この説教の中にジェレミイ・テラー、ア・ケンピス、ウィリアム・ロー、また他の神秘主義者から学んだホーリネスの概念や完全の思想が、凝縮されているといえよう。この説教は、「キリスト者の完全」を追及し続けた彼の生涯の中で、まさに大切な一里塚であったと言えよう。彼はこの説教の時点で、そのような心の割礼を経験したとは告白していないが、追及すべき目標を見出したと言えよう。

#### E. 全的献身の思想について

ア・ケンピスは、「すべてのことに優ってイエスを愛することについて」という章の中で、「人生において、死において、イエスに近くありなさい。すべてが失敗しても、あなたを助けることのできる主の忠実さに、あなた自身をささげなさい」<sup>51</sup>と記している。また、ア・ケンピスは、「あなたが、私の意志の中で、完全な自己放棄を学ぶことを私は願っている」<sup>52</sup>と述べている。ア・ケンピスから学んだことについて、ウェスレーは、「私が知ったことは、たとえ、私の全生涯を献げても（これができ、またこれ以上に進めないとは仮定して）、もし私の心、私の心のすべてを献げないならば、何の益もないということであった」(ウェスレー、フレッチャー『キリスト者の完全』4頁; *Works XI*, 366-67)と記している。全的献身は、ホーリネスの生涯をたどるための根本条件である。なぜなら、人の心は罪に腐敗しているからである。ア・ケンピスは、「完全に自己に死んでいない人は容易に誘惑され、小さいな、つまらないことに打ち負かされてしまう」<sup>53</sup>と記し、自己に死に、神への全的献身の

<sup>51</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 56 (II : VII 章「すべてに優ってイエスを愛することについて」).

<sup>52</sup> 上掲書, p. 159 (III : LVI 章「私たちは、自己を否定し、十字架によってキリストに倣うべきであること」).

<sup>53</sup> 上掲書, p. 10 (I : VI 章「節制のない情愛について」).

必要性を訴えている。ア・ケンピスは、「最初の人アダムを通して、人の性質は墮落し、腐敗しているのです、このよごれの刑罰は、全人類に及んでいる」<sup>54</sup>と記しており、ア・ケンピスにも彼にも、人間の腐敗性と恵みの確かさに対する深い認識があり、全的献身が必要となる。ウェスレーは、1734年の「天にあるように、地でも」という説教の中で、「ここで、私は、自己放棄の真実な土台と正しい方法を示すことにする。キリストに従い、天で行なわれるように、地においても、神のみこころを行なうすべての人々は、あなたのみこころがなりますようにという前に、私の願いではなく、まず言わなければならない」（説教 145 「天にあるように、地でも」 三・1）と記している。神に対する全的献身なくして、ホーリネスの生涯も勝利もない。

## F. 意図の純潔について

ア・ケンピスは、『キリストに倣いて』の中で、「人が彼の中で一つである時、人は、唯一の心を持つようになる。彼は、苦勞なしに、より多くの、より高い事柄を理解する。……純粋な、真実な、安定した霊は、多くのことどもに妨害されることはない」<sup>55</sup>と記している。ア・ケンピスは、『キリストに倣いて』のなかで、「人は、二つのことによって、つまり、単純さと純潔性によって、地上的なものから、引き上げられる。単純さは、私たちの意図であるべきであり、純潔性は、私たちの情愛であるべきである」<sup>56</sup>とも述べている。ア・ケンピスは、また「私たちの意図の目は、きよめられる必要がある。それは、唯一で、正しくなり、さまざまな対象を越えて、主に向けられるべきである」<sup>57</sup>とも記している。また彼は、「唯一のここを持つ人は、幸いである。というのは、彼らこと、十分な平安を楽しむだろう」<sup>58</sup>と述べて、

---

<sup>54</sup> 上掲書、p. 157 (III : LV 章「人の性質の腐敗性と、神的恵みの十全性」)。

<sup>55</sup> 上掲書、p. 6 (I : III 章「真理の教えについて」)。

<sup>56</sup> 上掲書、p. 52 (II : IV 章「純粋な心、単純な意図について」)。

<sup>57</sup> 上掲書、p. 123 (III : XXXIII 章「心の不一貫性、神に最終的な意図を持つことについて」)。

<sup>58</sup> 上掲書、p. 14 (I : XI 章「平安と、恵みへの成長の熱心な願いを持つことについて」)。

単一の心を持つことこそ、平安の道であることを記している。

ウェスレーは、1734年5月の「一つのことが必要」という説教の中で、「私たちがすべき一つは、高い召しのほうびを目指して、歩み、鎖、病と死から抜け出し、自由、健康と永遠のいのちに移されることである」(説教146「一つのことが必要」三・1)と述べている。本当に必要なことは一つだけである。彼は、また1736年2月、「唯一の意図」という説教を残している。彼は、「あなたは、神とマモンの両方に使えることはできない。だから、あなたの心すべてを神にささげなさい。さもなければ、あなたは何もささげていない。神は、中途半端では、仕えることができないし、仕えることはないのである」(説教148「唯一の意図」1)と記している。神を喜ばそうとする唯一の意図、動機に満たされるようにと彼は勧告した。このような意図の純潔についての思想は、ジェレミヤ・テラーの*The Rules and Exercises of Holy Living* (1650)<sup>59</sup>とともに、ア・ケンピスから学んだことは明らかである。ウェスレーは、1765年に若き時代を振り返りつつ、「1725年、私はテラー監督の『聖なる生活と死の規則』に出会った。特に意図に関する章に捉えられ、神に自分自身をささげる固定化した意図を感じた。この中に、私はすぐに『キリストに倣いて』との一致を見いだした」(日記、1765.5.14)と記している。初期ウェスレーの説教の中で、「唯一の意図」という説教こそ、ア・ケンピスの影響を最も受けたものと思われる。神を愛し、神の栄光のために生きるという唯一の意図と動機に満ちた生き方がある。これこそ、キリスト者の完全であるとウェスレーは理解したのである。

しかしながら、ウェスレーはア・ケンピスのすべての教えを受け入れたわけではない。ア・ケンピスは、「空の空。神を愛し、神に仕える以外、すべては空しい。この世を軽んじて、天の御国に向かおうとすることこそ、最高の知恵である」<sup>60</sup>と記している。彼は「あなたがたは、永続する都市を持って

<sup>59</sup> *The Rules and Exercises of Holy Living* については、ホームページでも読むことができる。[www.ccel.org/t/taylor/holy\\_living](http://www.ccel.org/t/taylor/holy_living) を参照のこと。第一章の section II で「意図の純潔の徴」について論じている。ウェスレーは、この書から意図の純潔について学び、彼の人生のすべてをささげることを決意した。

<sup>60</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 4 (I: I 章「キリストの模倣、世の空しさを軽蔑することについて」)

いない。どこに行っても、あなたは外国人であり、巡礼者である。キリストに内的に結びつくことがなければ、あなたは安息を持つことはないだろう」<sup>61</sup>と述べており、禁欲的な傾向があったことは否定できない。藤本満氏は、ア・ケンピスの教えの特徴を「日ごとの禁欲、この世からの離別が、傷のない内的いのち、つまり神的いのちを得るために絶対的に必要である」<sup>62</sup>と表現した。彼は、1737年「神の愛」という説教の中で、「愛の幸福の中に、空しさも、霊の苦痛もない。そこには幻滅も失望もない。愛とともに、平安と喜びがある」(説教「神の愛」三・6)と述べて、禁欲主義と一線を画している。

また、ア・ケンピスは、アウグスチヌス派の修道士であり、カトリックの影響(付録1参照)が受け、教会の権威を認め、化体論、マリア礼拝、煉獄、聖徒礼拝、よき業の功績を受け入れていたように思われ、少なくとも、聖餐式については、カトリック的な考えであったと言えよう。ア・ケンピスは聖餐式について、「私は、聖なる聖餐を通して、あなたと全く一つにされ、私の心がすべての被造物から遠ざけられることを願い、望んでいる」<sup>63</sup>と記している。ウェスレーは、化体論やマリア礼拝、煉獄、聖徒礼拝、良いわざの救いに対する功績については、合意することができなかったと考えられる<sup>64</sup>。

## 結び

初期ウェスレーは、霊的にも、神学的にも追及と確立の時代であった。ウ

---

<sup>61</sup> 上掲書 p. 48 (II : 1章「内的生活について」)。

<sup>62</sup> Fujimoto, *John Wesley's Doctrine of Good Works*, p. 60.

<sup>63</sup> Kempis, *The Imitation of Christ*, p. 197 (IV : XIII章「敬虔な魂は、聖礼典において、すべての心を持ってキリストとの一致を求めるべきこと」)。

<sup>64</sup> Rob L. Staples, *Outward Sign and Inward Grace : The Place of Sacraments in Wesleyan Spirituality* (Kansas City : Beacon Hill Press, 1991), pp. 213-17. ステイブルズは、化体論の歴史的な起源を説明し、ウェスレーは、化体論が、聖書と教会の伝統、理性、経験に反すると理解していたこと、聖餐式におけるキリストの真の臨在を信じていたことを述べている (p. 227) ; Schaff, *History of the Christian Church* VI, 288. シャッフは、ア・ケンピスにカトリック的な教えがあることを指摘している。もちろん、シャッフの指摘はある意味で正しいと言え

エスレーは、教会歴史のさまざまな伝統と教えから、影響を受けたのであるが、ア・ケンピスを初めとする神秘主義者からさまざまな影響を受けた。初期ウェスレーの説教の中には、ア・ケンピスからの直接の引用はないが、彼の信仰の確立、神学的な追及の過程で、彼から大きな影響を受けたことは確かである。ウェスレーは、1749年から55年にかけて出版した50巻の『クリスチャン・ライブラリ』に、他の神秘主義者とともに、『キリストに倣いて』を含めている<sup>65</sup>。

ハイツェンレーターは、「ウェスレーは、フランスの神秘主義者、ドイツのルター主義者、イギリスのカルヴィニストたち、アメリカのリバイバリストたち、スコットランドの福音主義者たちの多くに、強い共通性を感じた。彼らすべては、イグナチウス・ロヨラとア・ケンピスを通して、初代教会のリーダーにさかのぼることのできるホーリネスの遺産を共有したのである」<sup>66</sup>と興味深く、ア・ケンピスの貢献を指摘している。ウムフェリ・リーは、その著書*John Wesley and Modern Religion*の中で、「ジェレミィ・テラー、トーマス・ア・ケンピス、ウィリアム・ローの影響は、彼をキリスト者の完全へと向かわせることであった。内的、外的ホーリネスは、1725年から死までの65年間、彼のゴールであった」<sup>67</sup>とウェスレーにおけるキリスト者の完全の源泉についての的確に表現している。ウェスレーは、ア・ケンピスの教えのすべてを受け入れたわけではないが、ア・ケンピスは聖書的、実践的ホーリネスをウェスレーに伝達する掛け橋となったのである。ウェスレーは若くして、ア・ケンピスの著作と思想に接することが許され、彼の神学の形成過程において、大きな感化を受けたのである。「ケンピスは、すべての家庭に置かれるべきである」(*Works VIII*, 319)とウェスレーが述べたほど、ア・ケン

る。

- <sup>65</sup> Monk, *John Wesley : His Puritan Heritage*, p. 52; *Works XIV*, 220–23 (序文); Charles Allen Rogers, *The Concept of Prevenient Grace in the Theology of John Wesley* (Ann Arbor : UMI, 2002), pp. 59–63.
- <sup>66</sup> Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists* (Nashville : Abingdon Press, 1995), p. 321.
- <sup>67</sup> Umphery Lee, *John Wesley and Modern Religion* (Nashville : Cokesbury Press, 1936), p. 213. リーは、「生活の規律」という章で論じており、ホーリネスと規律の問題を扱っている。

ピスの教えは、初期ウェスレーの宗教経験とホーリネスの理解、彼の神学の確立のために多大な影響を与えたことを頷くことができる。

(イムマヌエル総合伝道団・フィリピン派遣宣教師)

## 付 録 1 (中世カトリックの歴史とア・ケンピスの位置)

1054 政治的、文化的、教理的違いのゆえに、東西教会の分離

1096-1270 8回のわたる十字軍の派遣(十字軍派遣の出費のために、免罪符の販売がなされる。)



- 1139 第1回ラテラノ会議において、司祭の結婚が禁じられる。  
ピーター・ロンバード、7つの聖礼典を強調
- 1198 インノケンス3世の時、ローマ教会の全盛期
- 1215 第4回ラテラノ会議において、年一回司祭への罪の告白の義務付け、  
化体説の受け入れ
- 1215 宗教改革の前動となったヴァルド派は、ピーター・ヴァルドによって  
始められる。免罪符を否定し、異端として断罪された。
- 1256 アウグスチヌス修道会、組織される。
- 1265-73 トーマス・アキナス、「神学大全」を著す。
- 1301 ボニファチウス8世、Unam Sanctiumにて、罪からの救いも、罪の  
赦しもローマ教会以外にないことを発布する。
- 1309-76 教皇のパピロン捕囚
- 1350c 共住生活の兄弟会(Brothers of the Common Life)、始まる。Devotio  
Moderna 運動、盛んになる。
- 1378-1417 教皇権の分裂
- 1780 ゲラルド・グルーツ(1340-84)、敬虔の培養のためにグループを組織  
する。Brothers of the Common Life の指導者となる。
- 1384 ジョン・ウィクリフは化体説を拒否し、殉教する。
- 1415 ジョン・フス、殉教の死を遂げる。
- 1434(?) アウグスチヌス会修道士トーマス・ア・ケンピス(1380-1471)の「キ  
リストに倣いて」の出版
- 1450c ボヘミア兄弟団(後のモラヴィアン教会)創設
- 1456 グーテンベルクによる活版印刷の発明
- 1498 サヴォナローラは、ローマ教会の内部改革を試みたが、絞首刑とされ  
る。
- 1517 マルチン・ルターによる宗教改革運動の幕開け

付 録 2 (初期ウェスレー説教リスト)

このリストは、*BE Works* I-IV の付録Bより転載。

BE edition	説 教 題	聖 書	日 付
---------------	-------------	--------	--------

133	死と解放	ヨブ 3 : 17	1725.10.1
134	神の国をまず第一に求めよ	マタイ 6 : 33	1725.11. 21
135	保護者天使について	詩篇 91 : 11	1726. 9. 29
136	死者に対する悲しみについて	II サムエル 12 : 23	1727. 1. 11
137	神のことばを腐敗させることについて	II コリント 2 : 17	1727. 10. 6
138A	偽善について	ヨハネ 1 : 47	1728. 1. 17
138B-C	偽善についての二つの草稿		?
139	安息日について	出エジプト 20 : 8	1730. 7. 4
140	理解の約束	ヨハネ 13 : 7	1730. 10.13
141	神の像	創世記 1 : 27	1730.11. 1
142	救霊の知恵	箴言 11 : 30	1731. 7. 12
143	非難される公けの娯楽	アモス 3 : 6	1732. 9. 3
17	心の割礼	ローマ 2 : 29	1733. 1. 1
144	神の愛	マルコ 12 : 30	1733. 9. 15
145	天であるように、地でも	マタイ 6 : 10	1734. 8. 20
146	一つのことが必要	ルカ 10 : 42	1734. 5
147	光の子どもより賢く	ルカ 16 : 8	1735(?)
109	義人の苦しみと安息	ヨブ 3 : 17	1735. 9. 21
148	唯一の意図	マタイ 6 : 22-23	1736. 2. 3
149	愛について	I コリント 13 : 3	1737. 2. 20